

氏名・(本籍地)	井上智裕(茨城県)
学位の種類	博士(仏教学)
学位記の番号	甲第86号
学位授与の日付	平成24年3月15日
学位論文題目	天台維摩経疏の思想研究
論文審査委員	主査 多田孝文 副査 坂本廣博 副査 塩入法道

井上智裕氏 学位請求論文審査報告書

「天台維摩経疏の思想研究」

論文の内容の要旨

本論文は、智顛(538～597)の天台維摩経疏を中心として、天台思想について八章を設け研究を試みたものである。本疏は、智顛の円熟した晩年、隋の晋王広に献上するために撰述されたもので、天台教学の概論を述べたものである。

第一章『維摩経』の成立と流伝において二節七項を設け、先行研究の成果を参考とし、『維摩経』の成立、梵本、漢訳、註釈書など成立史から中国仏教における本経の流伝と位置付けまでを概観した。

第二章『注維摩詰経』の思想では、二節五項を設け、中国最古の『維摩経』の注釈書である『注維摩詰経』の思想と天台経疏との関連について検討した。本章では、僧肇、羅什、道生の本迹思想の論理に注目し、さらに天台教学における『注維摩詰経』の位置付けと本迹思想について論じた。

第三章 淨影寺慧遠の『維摩経義記』については、四節を設け、義記の思想とそれに対する智顛教学における位置づけを検証し、さらに心識説について論じ、天台教学と地論師説との比較を試みた。

第四章 天台維摩経疏については、三節七項を設け、経疏の成立史、撰述の動機について確認した上で、智顛の維摩経観および、その依用、教相について論考した。

第五章 維摩経疏における天台佛土論の展開では、三節を設け、「仏国」、「仏土」の解釈について論考した。特に天台以前の佛土説について一節を設けて、『注維摩詰経』に登場する羅什、僧肇、道生の佛土説を検証し、さらに慧遠の仏土説を論究した上で、天台の仏

土説を論考した。

第六章 四土説の形成では、三節を設け、智顛の四土説に影響を与えたとされる慧遠の三土説と比較論考して、天台の四土説の特徴について論述した。

第七章 四土思想とその体系では、四節を設け、前章に続き四土説の各説とその関連と天台の思想について、維摩経や天台三大部に説かれる四土説の体系から考察を試みた。

第八章 不二の思想とその理解では、五節を設け、前章において常寂光土が佛の実相たる土とされていることに視点を置き、維摩経疏に説かれる実相について考察した。『維摩経』不二法門品では、真理について維摩居士は沈黙によって、そのあり方を示したのであり、概念や言葉を絶することを示した。不二法門の教説に対する解釈、不二思想、実相について考察した。

以上が、本論文の概要である。

本研究は、『維摩経』の成立から註釈書類の検証、天台以前の思想と天台教学との関連と位置づけなどを検証することによって、天台維摩経疏の思想的特徴を論考するものである。

また、天台維摩経疏において智顛は『維摩経』を依報仏国を説く經典として捉えていることから、維摩居士の教説も仏の説く仏国の義を扶成する説として、智顛は仏国を浄めることに集約して『維摩経』を理解していると論じた。

よって、本論は天台以前の思想を踏まえ、天台で展開される四土思想を中心として、その形成、体系、および四教、三観との対応から論じたものである。

以上が、本論文の要旨である。

審査結果の要旨

本論文の著者は、本学大学院仏教学研究科（天台学）を専攻し、継続して天台大師の思想や中国における維摩経理解に関する研究を続けてきた。

智顛の教学に関する研究は、法華思想や法華三大部を中心にして従来から広く行われている。近年、『維摩経』梵本写本が発見されてから、智顛の維摩経疏における天台思想の研究に関心がもたれるようになった。

第一章 『維摩経』の成立と流伝において、先学の研究をもとに『維摩経』の成立と漢訳および中国における受容と研究史を概観した。筆者は、論考に先き立つ序論的な章と考えていたようであるが、大乘仏教の成立史、『維摩経』の成立に関する分析を進めて、さらに新しい見解を提起してほしかった。

第二章 『注維摩経』の思想は、収録されている諸師の本迹観について、智顛の本迹観も含め詳述した。有名な僧肇の本迹説は羅什の説を継いだものであり、羅什の説は『大智度論』に説かれた法身菩薩のあり方がもとになっていると結論した。智顛は、これら天台以前の学説を詳細に検証し、諸師の説は通の立場より説かれたものであるとして、それを法華思想をもとに自己の思想の中に用いたと結論した。

第三章 浄影寺慧遠の『維摩経義記』については、心識説について論究し、慧遠の説は八識説を拡充し九識説に言及するようになっているので、智顛の説が慧遠のもとと断定することは出来ないと結論している。

以上、維摩疏の諸問題に関しては、先学の研究を踏まえて詳細に論じている。

第四章 天台維摩疏については、智顛の撰述の動機について、隋の晋王広からの懇請という外面的動機と、自身の『維摩経』の思想に対する内面的な関心によるものと論述した。

第二節における天台維摩経疏における老荘思想では、仏教の理論的な理解を促すために老荘の用語や思想を用いることがあるとして、天台維摩疏を検証した。

ただし、主に『摩訶止観』を用いて論じている点に問題があった。

智顛の『維摩経』の教相については、一往、方等時の経典とするのであるが、『維摩経疏』において「方便を帯びた円教を明かす経典として仏性常住を説く立場である」ことに注目した。また、『維摩経』は、根本的には仏国の因果を説くものであって、科段の分け方もそのように捉えていると結論した。

第五章から第七章にわたる維摩経疏における天台仏土論の展開は、筆者の中心的な課題の論述である。『注

維摩詰経』から諸師の仏土説を紹介した上で、天台の四土説の意味を四教、三観と関連して論じ、特に常寂光土が実相の理、絶待の境地であることを力説したことは評価できるものである。

第八章 不二の思想とその理解では、『維摩経』の不二法門に関する天台の思想を考察し、不二は、二なる相待を絶した実相の理そのものであり、不可説、不可思議なるものであるが、仏と衆生との因縁によって説くことが可能になる。その実相の理そのものは、衆生が求めるべき佛の境そのものであり、それは衆生の体として具えられているものに他ならない、また、因縁和合の法そのものが、衆生を含めてすべてが仏の境界というのである。本来、すべてが実相であり、常寂光土であるとの結論に致ったことは、評価すべきものである。

本論文の問題点を指摘する。1. 漢文の読み方に多少の難が見られた。2. 老荘思想について少し論考が浅かった。3. 『維摩経』そのものに対する筆者の見解がほしかった。4. 智顛が維摩疏をあらわした真意についてもう少し明確な見解が望まれる。

これらの点については、筆者も今後の課題としているので期待をしている。

本論文は全体を通して先学の説の検証、資料文献の扱い、論考の方法、論述の導き方などいずれを見ても優れたもので、天台教学を良く理解したものであり、学位請求論文（課程博士）として十分認められるものである。合格。